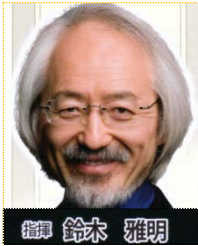


(第32回) 音楽鑑賞会

～紀尾井ホール室内管弦楽団第117回定期演奏会～

梅雨の合間の薄日が差し涼風が亘る宵に弁慶橋を渡って紀尾井ホールに向かう。第32回の「音楽鑑賞会」は紀尾井ホール室内管弦楽団（コンサートマスター：千々岩英一）の第117回定期演奏会である。

今回はバロック音楽の大家として世界的に知られる鈴木雅明が指揮者として初めて紀尾井ホールに登場するコンサートである。演奏曲目は18世紀後半の古典派モーツァルト、20世紀のバルトーク、ストラヴィンスキーという幅広い内容である。



鈴木雅明：1954年神戸生まれ。東京藝術大学音楽学部作曲科卒。

指揮者、チェンバロ、オルガン奏者。東京藝術大学名誉教授。

1990年に「バッハ・コレギウム・ジャパン」創設、バッハ演奏の第一人者、内外のコンサート・ホール、音楽祭に多数出演し高い評価を得ている。

プログラムの解説に沿って曲目を紹介する。

(1) ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト (1756～1791)**交響曲第29番イ長調 K.201 (I～IV楽章)**

モーツァルトは3回目のイタリア旅行からザルツブルグに帰郷した1773年から1774年の秋に掛けて交響曲の第22番から第30番までを作曲しているが、この29番は1774年4月6日の完成日付になっている。

(2) ベラ・バルトーク (1881～1945)**弦楽器、打楽器とチェレスタのための音楽 Sz.106 BB114**

バルトークは1940年にアメリカに亡命したが、この作品はヨーロッパ時代の末期を飾る代表作であり1937年1月21日にバーゼル室内管弦楽団によって初演された。弦楽を左右に分け中央に打楽器とハープ、チェレスタを配した演奏の音響現象がユニークである。

(3) イーゴリ・ストラヴィンスキー (1882～1971)**バレエ音楽「プルチネルラ」(全20曲)**

ソプラノ：松井亜希 東京藝術大学声楽科卒

テノール：櫻田亮 東京藝術大学声楽科・大学院卒 二期会会員

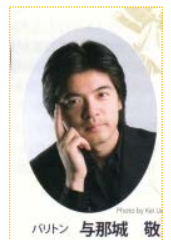
バリトン：与那城敬 桐朋学園大学研究科卒 二期会会員



ソプラノ 松井 亜希



テノール 櫻田 亮



バリトン 与那城 敬

ストラヴィンスキーがバロック時代の作曲家ペルゴレージの曲を中心に編曲したバレエ音楽。バロックや古典時代の形式や構成を踏襲しながら新しい独自の音使いを織り込んだ“新古典主義”スタイルといえる作品。1920年5月15日にパリのオペラ座で初演された（衣装と舞台美術はパブロ・ピカソ）。仮装喜劇に似合わせてソプラノは赤いドレス、テノールは緑のシャツ、バリトンは白のシャツで登場、独唱、合唱は身振りを付けての熱唱だった。

見事な白髪が黒の燕尾服に良く似合う鈴木はモーツァルトでは端正な、バルトークでは繊細な、そしてストラヴィンスキーでは全身を躍動させる指揮ぶりで、精鋭が集い高い演奏技術と豊かな音楽性を擁する紀尾井ホール室内管弦楽団を印象に残る素晴らしい演奏に導いた。演奏後はオベーションが鳴り止まなかった。

バルトークとストラヴィンスキーの2曲は初めてであったが様相の異なる3曲の新鮮な対比、広がり感に感銘を受けて何か楽しい気分になりながら家路に就いた。

なお、今回6月21日～22日のアイアンクラブ会員・ご家族のご参加は17名様でした。ありがとうございました。 (内田 俊介・記)